

危ないからこそ、ミサイル基地を置いてはならない



(2019年2月5日FBページに投稿)

平得大俣への陸上自衛隊の配備に賛成する人の多くは、「中国は危ない国で石垣島に攻めて来ようとしているから、備えなければ」と考えているようです。

確かに、東シナ海や南シナ海での、中国の「力による現状変更」の動きは、不法で、危険です。やめてもらわなければなりません。

しかし、「中国がいきなり石垣島に攻めて来る」は、まずあり得ません。

何故なら、それは、明らかに国連憲章違反の侵略行為なので、政治・外交面で孤立し、経済制裁で大打撃を受け、軍事制裁も受けかねず、大損するだけだからです。中国は、それがわからないほど愚かな国ではありません。

「そうは言っても、万一攻めて来らどうする」と言う人もいます。しかし、「いきなり攻めてくる」が「万に一つ」だとしたら、「百に一つ」あるいは「十に一つ」の、もっとずっと現実的な危険が、東シナ海にはあります。それは、尖閣諸島や宮古海峡の周辺で、有事（武力衝突）が起きることです。

尖閣諸島周辺では、中国公船がひんばんに領海に侵入し、宮古海峡では、空母を含む中国艦艇が、軍用機を伴って通過する例が増えています。そして、接続水域を中国の原子力潜水艦が通ったり、中国軍機に自衛隊機がスクランブルをかけたりにするたびに、防衛省関係者が、「ここはいつ有事になっても不思議はない」などと、コメントしています。

これほど緊張している原因は、領有権や海峡を通る権利を巡って、争いや摩擦があるからです。そういう場所では、双方が、国連憲章が認める「自衛権」を掲げて、武力行使に走りやすくなります。

しかも、この海域で影響力を持つアメリカ、中国、日本は、それぞれの思惑から、「全面戦争は、絶対に避けるべき」だが、「東シナ海限定の局地戦争なら、あり得る」と考えて、大軍拡を進めています。だから、「危ない」のです。

石垣島に配備予定の地対艦ミサイルは、尖閣諸島や宮古海峡周辺などで有事が発生したときに、その近くにいる相手の艦隊を攻撃するための兵器です。だから、射程が約200kmもあるのです。

こんなミサイルを構えれば、相手は、有事発生とほぼ同時に、石垣島の地対艦ミサイルを潰そうと、大量の弾道ミサイルや巡航ミサイルを撃ち込んでくるでしょう。そうしなければ、自国の艦隊がやられますから。

陸自の地对艦ミサイルは、車載式で、島の各地に展開して、発射、移動を繰り返します。だから、相手のミサイルは、島中を襲います。私たちは、逃げる間もなく、地面に伏せたり、丈夫な建物に隠れたりするほかありません。そうすれば助かるという期待も、あまり持てませんが。

正に、市民連絡会の上原秀政共同代表がいつも言っているように、「火種のある所に発火装置を持ち込んではいけない」のです。



このミサイルを発射したら、相手のミサイルが大量に飛んで来る（合成写真）

不幸にして尖閣諸島や宮古海峡の周辺で有事が発生しても、島の安全を守るには、非武装でいるのが一番です。

現在の戦時国際法（国際人道法）は、たとえ有事（戦時）でも、「攻撃は軍事目標に限る」と定めています。だから、非武装の島を攻撃するのは、国際法違反です。多くの国を味方につけたい戦時の外交にとって、国際法違反は致命的です。

純軍事的に見ても、生死をかけた海空戦のさ中に、非武装の、軍事的意味のない島の攻撃に、装備と兵員を割く愚かな司令官はいません。まして、ミサイルを撃ち込んで無防備の市民を殺傷したりしたら、「人道に対する罪」で国際裁判にかけられます。

しかし、一番大事なのは、そもそも有事が起きないようにすることです。それには、領有権や海峡を通る権利の問題を冷静な話し合いで解決して、紛争の「火種」自体を無くすことが、最も必要です。

そのためにも、石垣島へのミサイル配備は、新たな「火種」になるだけです。「百害あって一利なし」です。